

## カナダモデルのICEルーブリックによる評価と検証\*

江頭 知遼\*\*, 登り山和希\*\*\*, 加藤 久雄\*\*\*

### Evaluation and verification by ICE rubric of Canadian model

Tomoharu EGASHIRA\*\*, Kazuki NOBORIYAMA\*\*\* and Hisao KATO\*\*\*

**キーワード:** ICEモデル・ルーブリック・高大連携・『主体的・対話的で深い学び』

#### はじめに

これまでの研究において、生徒や学生の活動における評価をルーブリックに関する評価表を用いて行ってきた。

この背景には、高等学校と大学における評価の系統化が大きな課題の1つであると考えられてきたため、前回までの研究において諫早商業高校商業クラブの生徒と長崎ウエスレヤン大学の学生に同じ内容のルーブリック評価表を用いて評価を行った<sup>註1)</sup>。しかし、前回の研究で用いたルーブリック評価表では、一定の量的な評価は行うことができたとは考えているが、質的な評価においては十分に行うことができなかったと考えている。また、前回作成した評価表は『主体的・対話的で深い学び』<sup>註2)</sup>を評価するには、あまりにも内容の要素が薄く、所々に不備があったと考えている。

本研究は、Sue F Young氏が提唱するカナダで実践され世界的にも広がりつつある、『ICEモデル』<sup>註3)</sup>を用いたルーブリック評価に関する実践的・自省的研究であり、『総合的な探究の時間』における教育プログラムの構築を目指すものとなっている。

#### 1. Background (研究の背景)

##### 1-1. 主体的な学びとは

生徒または学生が学ぶ意味は単に、知識や技能を習得するだけでなく、学びの主体としてアイデンティティを形成し、生涯にわたって成長させていくことになる<sup>註2)</sup>。その中で、生徒または学生が主体的に学び学年をおうにつれ段階的に成長していかなければならない。主体的学びとは「能動的学習」すなわち「アクティブラーニング」の

ことである。近年日本では中教審答申において、この「能動的学習」を「能動的学修」という字に置き換える動きがあった。そのため、カリキュラムや教授法と直結した学修が行われるように移行している<sup>註3)</sup>。

##### 1-2. ルーブリック (評価表) とは

ここでは改めてルーブリックについて解説していく。大学や高校の現場で用いられるルーブリックとは、左列に評価指標 (学習活動に応じたより具体的な到達目標) と、それに即した評価基準 (レベル) が書かれた配点表のことを指す。評価指標と評価基準によって、それぞれの評価指標ごとにどの程度、目標が達成できたのかを数量的に計ることができる。また、評点を与えることで生徒がどのくらい活動に対して行動したかの特徴を示す事ができる。これらの成績評価方法をルーブリック評価という。

評価指標と評価基準によって達成水準が明確になることから、通常のテスト法では評価が困難な「思考・判断」や「関心・意欲・態度」、「技能・表現」の評価に向くとされ、スケートやバレエといったスポーツの評価や絵画といった芸術作品の評価などに活用されている。

大学の講義においても、論文やレポートの評価、グループ活動やプレゼンテーションの自己評価において、ルーブリックを用いて評価している大学が国内にも多く存在している。

また、ルーブリックによる評価は学生側にも大きなメリットがある。評価の基準が明確に学生に示されるので、何ができるようになればいいのか、何を学ぶのが正確に把握できる。それによって、新学習指導要領における3要素を達成することができると考えている。

さらに、講義の後にルーブリック評価表を返却

\* Received January 12, 2022

\*\* 鎮西学院大学 地域総合研究所客員研究員・長崎県立大学大学院修士課程

\*\*\* 鎮西学院大学 現代社会学部 Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 854-0082, Japan

することで、「自分が今、何ができていて、何ができていないのか」を把握する事ができる。すなわち、振り返りを行うことで、前段階の評価を次の活動に活かすことができるのである<sup>註4)</sup>。

これは、大学での講義における評価だけに限らず高校での授業の評価としても使用されている。

### 1-3. ICEモデルとは

ICEとは、アイデア (Ideas)、つながり (Connections)、応用 (Extensions) の頭文字である。アイデアとは、学びのプロセスの最初のステップであり、学習する上での知識や技能のことを指すと考えている。また、学習者がどのような手順をたどるかは、いくつかのアイデアで決まると言っても過言ではない。なぜなら、いくつかのアイデアがつながりあって課題をクリアしていくからである。続いて、つながりとは先述したようにアイデアとアイデアをつなげる学習過程のことである。学習者が理解を深めていく際に、個々の知識と知識との間に関連がある事を理解しているということが重要である。どのようなテーマや課題であったとしても生徒や学生に、既に知っていることと今学んでいることとの間につながりを作るように導かなければいけない。また、主体的学びにおいては、この部分が重要であると考えている。最後に、応用は、学びにおける最終段階であり、学習者が作業の手順を確認しなくても、意識的に知識と知識を関連付けたり、自己の過去の経験と新しい知識とをつなげようとするのである。学びにおける段階としてアイデア、つながり、応用は、表面的なものから深い知識へと学びが深まっていく過程を表している。表1ではそれぞれの学習過程における段階の具体例を挙げている<sup>註3)</sup>。

表1. ICEの学習過程と段階について<sup>註3)</sup>

アイデア	生徒が重要基本事項、基礎的な事実関係、語彙と定義、詳細、基本的な概念を伝達できる時
つながり	生徒が基本概念と概念との間にある関係やつながりについて説明することができる。生徒が学んだことと既に知っていることの間にある関係やつながりについて説明できた時
応用	生徒が新たに学んだことを本来の学習の場以外の所で新しい形で使う時、それにどんな意味があるのかという仮説の質問に答えられる時

## 2. Problem (問題点)

### 2-1. 現代の高校生における問題点

アイデンティティとは人格における存在証明または同一性のことを指す。以下、高校生におけるアイデンティティについて「財団法人日本青少年研究所」の資料を用いて問題をまとめていく<sup>註5)</sup>。

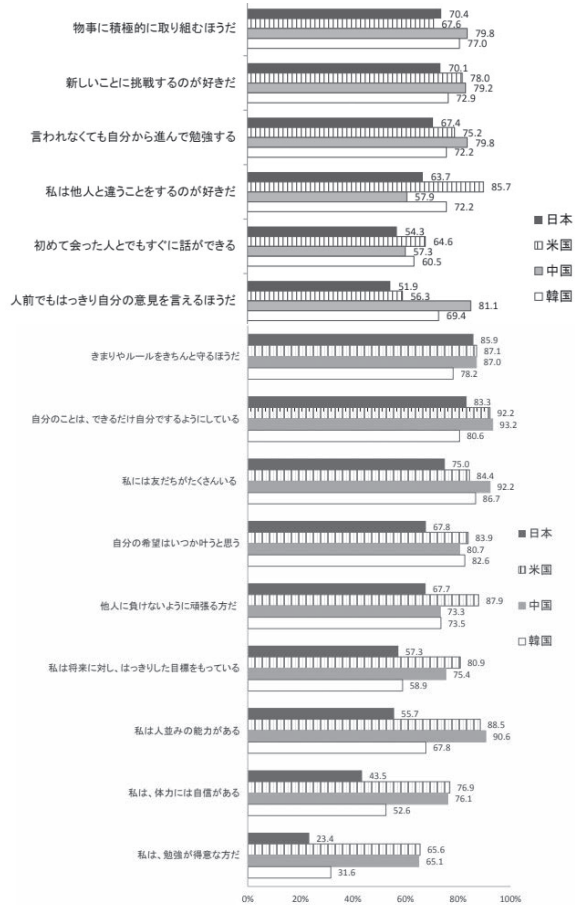


図1. 高校生における性格についての自己評価<sup>註5)</sup>

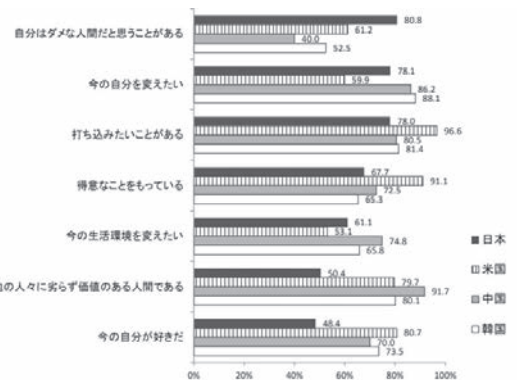


図2. 高校生における自己肯定感について<sup>註5)</sup>

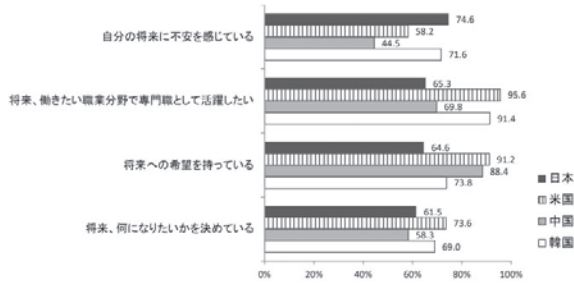


図3. 高校生における将来の目標について<sup>註5)</sup>

図1～図3において高校生における自己評価や自己肯定感について他の周辺諸国と比較して低いという問題点があげられる。ICEモデルにおける学習方法は、過去の経験と自己の新しい経験の中で知識を身につけていく学習スタイルである。そのため、日本の高校生における自己肯定感の低さ等の問題についてもICEモデルを用いることで解決の糸口になるのではないかと主著者は考えている。

### 3. Difference (相違点)

#### 3-1. 今回の研究とこれまでの研究との違い

以前行った研究（学生視点から考える地域課題解決型学習を通じた高大連携に関する研究Ⅱ）においてルーブリックを用いて、第2回諫早ステーションフェスティバルの事後自己評価を行った。そこで用いたルーブリックは、あくまで量的な質を測るモノであって、質的なモノを測ることはできていなかった。

そこで、今回の研究はカナダで行われているICEモデルのルーブリックを用いて、生徒または学生の質的な学習の評価を測ろうと考えたのである。

量的な評価から質的な評価へ変えることは、学習者の主体的な学びを促進し、それを評価するためには重要なことであると考えている。

#### 3-2. 量的な評価から質的な評価へ

量的な評価と質的な評価の違いが一目で分かるようにICEモデルの第一人者であるSue F Young氏が書かれている本を和訳した「主体的学び」につなげる評価と学習方法という本から、第二言語習得を評価するためのルーブリックを用いて比較する。

表2. 第二言語習得を評価するための計量的なルーブリックの例<sup>註3)</sup>

要素	レベル1	レベル2	レベル3
理解度	主な考えのうち、いくつか含まれている	主な考えのうち、ほとんどのものが含まれている	主な考えのすべて、あるいはほぼすべてが含まれている
言葉の使い方	基本的な文型や語彙をいくらか使っている	基本的な文型と語彙のほとんどを使っている	基本的な文型と語彙のすべて、あるいはほぼすべてが含まれている

表3. 第二言語習得を評価するためのICEを使った質的なルーブリックの例<sup>註3)</sup>

要素	考え	つながり	応用
理解度	二つの言語との間で、語彙または文に一对一の対応がある	文節の全体的な意味が考慮されている 文節を文脈に関連づける	訳文が原文に忠実である
言葉の使い方	書かれている文字を、そのまま訳している	形容詞、助動詞、名詞などの順序が調節されている	適切なイディオムを用いている

### 4. Purpose (目的)

本研究においてICEルーブリックを用いる目的は主に次の4つである。①「高校または大学が生徒および学生に身につけて欲しい力」を可視化することで、生徒や学生が日々、何を目指して学習・活動すべきかが理解しやすくなる。②生徒および学生が活動の最後に「目標についての力を身につけることができたのか」自己チェックすることで、自身の「達成度合い」や「課題」、「伸び」を視覚的に理解できるようになる。③教員と生徒および学生が、「学生に身につけて欲しい力」を共通認識していくことで、一貫性のある指標での評価が可能となる。④質的な評価を行うことで生徒または学生の主体的な学びを育成することができる。本研究においては、特に4つ目の主体的な学びの育成とその評価が重要であると主著者らは考えている。

### 5. Active Learning (アクティブラーニング)

#### 5-1. アクティブラーニングの授業形態について

##### (1) 付加型

50分の授業の内、その8割を教師の講義や説明で進め、それらの学習の成果を踏まえ、終わりの10分程度で演習や協議を行うタイプの授業である。そのため、授業の終わりのセクションにおいて、講義の内容を踏まえた活動がうまく機能するかが問われている。演習においては、学習内容の活用。記述においては、視点や価値の付加に重点を置くことが望ましいとされている。だが、実際の授業では、どうしても解説中心の授業展開となってしまうため、演習や協議に至るまでの間に生徒の集中力が続かないことが多く、あまり効果的なタイプとは言いづらい。そのため、授業の最初のセクションで教科書を輪読させたり、疑問点にアンダーラインを引かせたり、読み取った内容をペアでシェアさせたりなど、アウトプット系の活動を導入する必要がある<sup>註3)</sup>。

## (2) 分散型

付加型における講義・説明の時間を縮減し、演習や協議の時間を増やすことをねらいとするタイプの授業である。50分の授業では15分を講義・演習の1セットとし、3セット構成の授業として展開する。この型は、演習が多い理系科目で比較的实施しやすい形態である。逆に、地歴科目の様に記述中心の科目においては、学習内容を意図的にブロック化することによって生徒の集中力を保つことができる<sup>註3)</sup>。

## (3) 置換型

授業そのものを演習・協議などを軸として構成する型である。例としては、ディベートなどがこれに相当する。対話ベースで授業は進み、議論を深めるために探求的なプロセスを経ることが多い。課題の設定、発問の構成、拡散・収束のコントロールなど授業構成と指導において高いスキルが必要となる。また、生徒の教材への関与が強まるため学習効果も高まるが教材研究に費やす時間が長くかかるため、常時このタイプの授業を展開するのは容易なことではない<sup>註3)</sup>。

## (4) ユニット型

これは、上述した3つの型とは異なり、学習項目を中心に考えた型だ。例えば、1つの学習項目が3コマ分の授業時数をもつ場合、前半の2コマを知識の理解・習得の時間に充て、後半の1コマを知識の活用の時間に充てるものである。このタイプも、付加型と同様のデメリットを持ってお

り、前半の2コマで一方向的な知識注入型の授業になってしまい、生徒の興味・関心が薄れてしまい、集中力が低下する危険性がある。だが、付加型と明確に異なる点は、後半の1コマで探求的な活動を行うためのまとまった時間をとることができるため、より深い学びを展開することができる<sup>註3)</sup>。

## (5) 反転型

ある事柄に関して、教師が説明を行う前に、生徒から経験や意見を聞き出し、共有することから始める授業である。対象と自己との関わりが学びのベースとなるため、生徒の主体性や探求意欲が高まりやすい。生徒の多様性が尊重されるが反面、学びの方向付けや収束に教師の力量が求められる。教師は、多量な知識と技術を持ち、生徒をファシリテートする能力が必要となる<sup>註3)</sup>。

## 5-2. アクティブラーニングの種類

### (1) PBL (Problem Based Learning)

Problem Based Learning (プロブレム・ベースド・ラーニング) は、日本語に訳すと問題解決学習のことで、これを理論的に基礎づけたのが、アメリカの哲学者であり教育学者のジョン・デューイである。問題が解決される成果と学びへのプロセスの双方が大事であると考えられており、何を問題として設定するかという問題への明確な定義づけが重要であると考えられている。また、地域の課題や背景を掘り下げ、問題を設定するコミュニティ・ラーニングやサービス・ラーニングの学習手法も用いられている。このように、プロブレム・ベースド・ラーニングとは目標に向かってどのようにアプローチしていけばいいかを構想し、問題を達成することが重要である。プロブレム・ベースド・ラーニングのアプローチの過程として、①課題を探求、②問題を設定、③目標と目的を設定、④プロセスまたは過程を設定、⑤設定したプロセスをふむ、⑥目標の達成、⑦リフレクションまたは振り返り、⑧新たな問題を設定という過程をふむ<sup>註6)</sup>。

### (2) PBL (Project Based Learning)

Project Based Learning (プロジェクト・ベースド・ラーニング) は、目標を達成するまでのプロジェクト (明確な計画) を組むことが重要であると考えられており、どのようなメンバーで、いつまでに、何をするのかを詳細にスケジュール

グすることが大事である。すなわち、その明確な目標に向かって活動するメンバー全員が最高のパフォーマンスをすることが求められている。このプロジェクト型学習は、デューイの問題解決学習に影響を受けて生み出されたものである。また、文科省が新学習指導要領で提唱しているアクティブラーニング（プロジェクト型学習）の1つである<sup>註6)</sup>。

### （3）探究学習

探究学習とは、生徒が自分で問題や課題を見つけ、情報収集や情報の整理・分析、まとめを主体的に行い、最適な答えを見つけ出す学習方法を指している。情報の収集は文献や書籍からではなく、フィールドワークによっても実践的活動の中でも収集することができる。そのため、社会貢献活動においても効果的に活用でき、誰かと協同して課題を解決することで、多様な考え方を持つ他者と適切に関わったり、新しい価値を創造したりすることで、地域社会への参画や貢献の態度に繋がるとされている。

また探究学習に取り組んでいる学生ほど思考力を必要とする科目の学力が伸びるというデータもある（参考：文部科学省「総合的な学習の成果と課題について」）。この結果より、自ら考えて最適な解を探す活動によって思考力や表現力を伸ばすだけでなく、考え方のプロセスを学ぶこともできるため、より深い学びへととなり学力自体の向上にもつながる<sup>註7)</sup>。

### （4）ジグソー法

ジグソー法は3ステップに分かれており、2ステップまでを準備段階として、最後の3ステップ目でジグソー活動に入る。①ホームグループ、②エキスパート活動、③ジグソー活動の3ステップである。まず、ホームグループとは学習者が所属するグループで、学習者を均等に振り分けグループを作り、課題を設定。次に、グループ内のメンバーごとに違う学習をしてもらい、その後同じ内容を学んでいる他のグループの構成員同士でエキスパートグループを組み、学びを深める。最後に、エキスパートグループで学習した内容を理解し、最初のホームグループへ戻す。そこで最初に与えられた課題に取り組み、課題を解決する中でエキスパートグループにおいて学んだ内容を他の生徒に説明を行う。説明を聞き個々の内容についてまとめる。そのため、協調性や合意形成、プレ

ゼンテーション能力や創造力が必要になり、それらを鍛えることができる<sup>註8)</sup>。

### （5）フィールドワーク

フィールドワークは、学校の外に出向いて研究対象を直接観察し、実践活動において学ぶ手法である。教科書や資料集を用いて学ぶより、実際に現場に出て活動することで多くの情報を得ることができる。また、対象が何であっても、直接感じた経験は多くの発見につながります。そのような活動の中で得た研究成果について考察・分析、レポートにまとめたり発表したりすることで、「主体的で対話的で深い学び」においての能力を身に付けることができる<sup>註3)</sup>。

### （6）反転授業

反転授業とは、「学校＝授業、家庭＝復習」というこれまでの形式を反転させる考え方にもとづいている。パソコンやタブレットといったICT機器を用いて映像教材を使用し家庭学習を行い、それについて学校の授業で意見を互いに共有するという学習手法である。この手法は、家庭で予習を行い、学校で復習を行う、今までの学習手法と反転の形をとることになる。デメリットとして、家庭での学習の精度にばらつきが出てしまうことや、オンライン教材で学習するための十分な通信環境を家庭で揃えることができない等が問題視されている。だが、今日の学校現場においては、コロナ禍の影響を受けオンライン授業が普及したからこそ、最も有効的なアクティブラーニングの手法と考えられている<sup>註9)</sup>。

## 6. ICEルーブリックの作成と授業づくり

ICEルーブリックは質的評価であるため、量的評価とは記述が異なったものとなっている。そのため、思考の結果だけでなく、プロセス（学習過程）や思考の方向性などに関する記述も加えることが可能になる。実際にICEルーブリックを作成する場合は、表に示した動詞に着目して評価基準を記述する方法がとられる。まず、最初に行うのが、Extensions（応用）の部分すなわち最終的に求めている学習段階の部分に何を設定するのかを考え、検討を行う。その後、Connections（つながり）とIdeas（知識）へと相互関係を意識しながらICEルーブリックを作成していく。

## 7. ICEモデルを用いた指導案の例

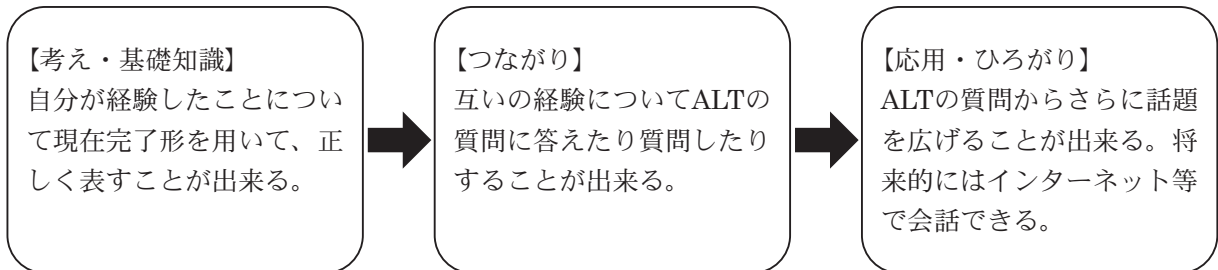
7章については、ICEモデルを用いて学習指導案を作成している事例をとりあげていく。1節に関しては、広島県教育委員会の実践研究を用いる。広島県は、主体的学びの創造を促進させるためにICEモデルを用いた学習手法の一部を推進校で実践的に取り組んでいる。本研究においては、広島県竹原市立吉名中学校の実践事例を用いる。指導案に関しては、一部内容を抜粋して提示する。2節に関しては、主著者自身が作成した指導案を用いる<sup>註10.11)</sup>。

### 7-1. 現役教師が作成した指導案

## 外国語科（英語）学習指導案

指導者：○○ ○○

- 1 日時 平成●●年○月○日（月）○校時（●●：○○～●●：○○）
- 2 学年 第○学年○組（男子○名 女子○名）
- 3 場所 ○階●●教室
- 4 単元名 L5○○○○
- 5 単元の目標
  - 間違いを恐れず、積極的にコミュニケーション活動に取り組む。【関心・意欲・態度】
  - ◎経験したことについてつながりのある英文で説明する。【外国語表現の能力】
  - L5の文章を読んでその現状や書き手の気持ちを読み取る。【外国語理解の能力】
  - 現在完了形（経験・完了用法）、形容詞to不定詞（原因を表す副詞的用法）を用いた文の構造を理解する。【知識・理解】
- 6 単元のICEモデルイメージ



### 7 本単元のシンキングツール

【PMIシート（いいこと・悪いこと・面白いこと）】

対象について、「いいところ（プラス：Plus）」「だめなところ（マイナス：Minus）」「興味をもつこと・おもしろいところ（インタレストィング：Interesting）」の3つの視点から印象や意見を書き込む。「おもしろいところ」については肯定・否定のどちらかわからないことを記述させる。

P Plus プラス いいところ	M Minus マイナス だめなところ	I Interesting インタレストィング おもしろいところ

### 8 本時の内容（省略）

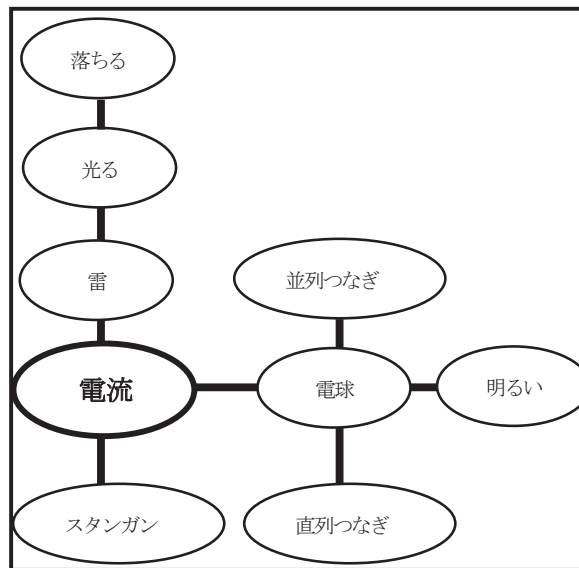
9 単元の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>• ペアやグループなどの活動に協力して取り組んでいる。</li> <li>• 発表の仕方や留意点、話す内容について話し合っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 声の大きさ、強弱、発音などに気を付けて話すことができる。</li> <li>• 現在完了形（経験用法）を用いて返事を書くことができる。</li> <li>• 経験したことについてつながりのある英文で話したり質問したりすることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• フェアトレードについての文章を読んでその現状や書き手の気持ちを読み取ることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 現在完了形（経験・完了用法）、形容詞to不定詞（原因を表す副詞的用法）を用いた文の構造を理解している。</li> </ul>

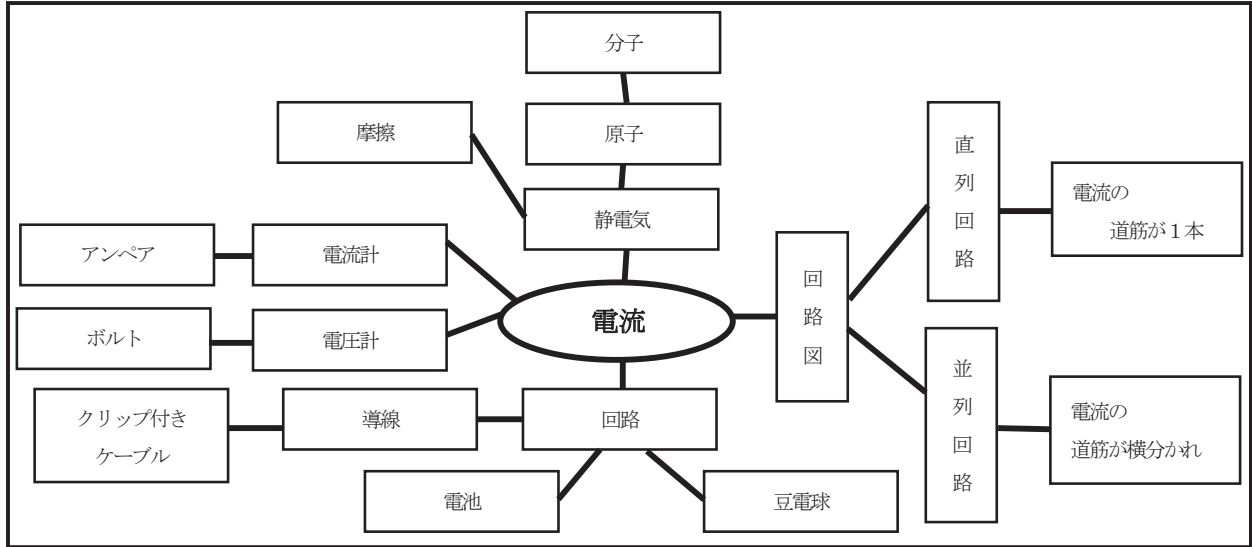
10 ICEを使ったルーブリック

要素	考え	つながり	ひろがり
コミュニケーション	○適切な声の大きさ、強弱発音、速さなどに気を付けて話している。	○相手へのアイコンタクトやうなずき、表情などをつけて、相手に応じた話をしている。	○練習した内容以外の初めての話題や授業以外の場でも相手意識をもって対応している。
文の構造・内容	○1つの質問に対して1英文書いており、英文を羅列している。	○質問ごとにまとまりをもたせて順序よく表している。	○それぞれの事実を踏まえて、それらを要約したり考えたりしたことを表している。
言葉の使い方	○現在完了形を正しく使っている。 ○正しい綴りで記述している。	○代名詞に置き換えたり接続詞を使用したりしてつながりをもたせている。	

中学校理科におけるシンキングツール（イメージマップ）



<PMIシートを活用していない場合>



<PMIシートを活用した場合>

中学校保健体育科振り返りシート  
(振り返りシート)

1	本時の目標は達成できた	A・B・C
2	積極的に参加し、楽しく授業に取り組んだ	A・B・C
3	打ち方・足さばき等を丁寧に意識して行えた	A・B・C
4	的確にきれいに打突部位に打ち込むことを意識して行えた	A・B・C
5	授業内容の流れ・練習内容を理解し、行うことができた	A・B・C
6	仲間と協力し、アドバイスをすることができた	A・B・C
7	安全面に注意して行えた	A・B・C
8	自分の課題を見つけることができた	A・B・C
9	自分の課題を克服することができた	A・B・C

註10.11)



7-2. 主著者自身が作成した指導案

## 公民科（現代社会）学習指導案

学校名 ○○○○高等学校

日 時 令和○年○月×日（月）△校時

第1学年○組 男子×名 女子○名 計△名

指導者：○○ ○○

1 単元名 日本国憲法と国民生活（使用教科書：高校 現代社会 新訂版 ○○出版）

2 単元について

◎単元観 本単元は、民主政治の基本原則に基づきながら、日本国憲法の基本的原則と政治機構、民主政治における世論形成と政治参加の意義について理解を深めさせることが重要である。また、民主政治の前提となる個人の在り方について、個人と国家を中心に考察させ、民主社会に生きる人間としての在り方・生き方について考察させることを主な狙いとしている。特に、基本的人権の保障、国民主権、日本の政治機構について理解させることを目標としている。

◎生徒観 本学級の生徒は、授業中の発表が活発であり、授業に熱心に取り組んでいる。また、国会と内閣の内容については、内閣総理大臣指名選挙の話題が出ているため、生徒の関心も高いのではないかと考えている。一方で、中学校社会科で学習した内容が断片的な知識にとどまっている生徒もみられる。難易度が高い発問については、ペアと協力させることでその問題を解消したい。

◎指導観 本単元の指導に当たっては、生徒が中学校社会科で習得した知識や課題解決的な学習の成果を踏まえて、日本における政治機構についてパワーポイントとワークシートを上手く活用し、生徒が理解できるようにしたい。その上で、議院内閣制の仕組みについてオープンクエスチョンの発問を用いて捉えさせるように指導したい。

3 単元目標

関心・意欲・態度

- 現代の民主政治と政治参加の意義に対する関心を高め、それらを意欲的に追究し、とらえることができる。

思考・判断・表現

- 政治機構と国民生活について多角的・多面的に考察し、その結果をまとめたり、発表したりして適切に表現する事ができる。

技能

- 現代の民主政治と政治参加の意義に関して、資料集や教科書の情報を適切に選択したり、内容を読み取ったり、ワークシートにまとめたりすることができる。

知識・理解

- 政治機構に関する基本的な見方や考え方を理解し、その知識を身に付けることができる。

4 指導計画 (全4時間)

1. 国会の地位と役割・国会の構成 (1)
2. 国会の権限・国会の審議 (1)
3. 議院内閣制・内閣の権限 (本時)
4. 行政権優位と官僚支配・官主導社会の転換 (1)

5. 本時の学習指導

(1) 題材名 5.政治機構と国民生活

(2) 目標

- ・内閣と国会の関係性や内閣の権限について知り、議院内閣制の仕組みについて理解できる。

(3) 展開

過程	学 習 活 動	教師の支援手立て	教具等	評価
導入 3分	1. 内閣において明治憲法と日本国憲法の明記について比較する。 ①パワーポイントで内容を確認しながら説明を聞く。	戦前と戦後の内閣の在り方について説明を行う。 ①パワーポイントを用いて説明を行う。	・資料集P105 ・パワーポイントP2	(関心・意欲・態度) 内閣について関心を得ることができた。
6分	2. 議院内閣制について理解する。 ①イギリス型の議院内閣制について説明を聞く。 ②内閣は行政権の主体である事について説明を聞く。 ③議院内閣制の仕組みについて説明を聞く。 ④教科書を用いながらワークシートの穴埋めを行う。 ⑤パワーポイントで内容を確認する。	2. 内閣の組織について説明を行い、生徒に理解させる。 ①イギリス型の議院内閣制について説明を行う。 ②内閣は行政権の主体である事について説明を行う。 ③議院内閣制の仕組みについて説明を行う。 ④机間指導を行う。 ⑤パワーポイントを用いて説明を行う。	①②・パワーポイントP3 ③・パワーポイントP4 ④・教科書P132.1~7・ワークシート(1) ⑤・パワーポイントP5・ワークシート(1)	(知識・理解) 日本の議院内閣制について理解できた。  (知識・理解) 行政権について理解できた。
5分	3. 内閣と国会の関係性について理解する。 ①内閣と国会の関係性について説明を聞く。 ②教科書を用いながらワークシートの穴埋めを行う。 ③パワーポイントで内容を確認する。	3. 内閣と国会の関係性について説明を行い、生徒に理解させる。 ①内閣と国会の関係性について説明を行う。 ②机間指導を行う。 ③パワーポイントを用いて説明を行う。	①・パワーポイントP6 ・資料集P148① ②・教科書P132.7~9 ・ワークシート(2) ③・パワーポイントP7 ・ワークシート(2)	(知識・理解) 内閣と国会の関係性について知識を得ることができた。
4分	4. 内閣の総辞職について理解する。 ①内閣の総辞職の意味について説明を聞く。 ②内閣の総辞職の種類についてワークシートに記入する。	4. 内閣の総辞職について説明を行い、生徒に理解させる。 ①内閣の総辞職の意味についてパワーポイントを用い、生徒に説明を行う。 ②内閣の総辞職の種類についてパワーポイントを用いて生徒に説明を行いながら、ワークシートに記入させる。	①・パワーポイントP8 ②・パワーポイントP8 ・ワークシート④  ①・パワーポイントP9 ②・資料集P149⑥ ・パワーポイントP9 ・ワークシート⑤	(技能) 内閣の総辞職についてポイントを押さえて、まとめることができた。

4分	<p>5. 衆議院の解散について理解する。 ①衆議院の解散の意味について説明を聞く。 ②衆議院の解散の種類についてワークシートに記入する。</p>	<p>5. 衆議院の解散について説明を行い、生徒に理解させる。 ①衆議院の解散の意味について説明を行う。 ②衆議院の解散の種類についてパワーポイントを用いて説明を行いながら、生徒にワークシートへ記入させる。</p>	<p>①・資料集P148③ ・ワークシート(3) ②・パワーポイントP10 ・ワークシート(3) ③・教科書P133.4 ・パワーポイントP11 ・ワークシート(3)</p>	<p>(技能) 衆議院の解散について資料を用いてまとめることができた。</p>
5分	<p>6. 内閣の権限について理解する。 ①内閣の権限について資料集を用いてワークシートの空所を記入する。 ②語句の確認と説明を聞く。 ③行政委員会の説明を聞く。</p>	<p>6. 内閣の権限について説明し、生徒に理解させる。 ①机間指導を行う。 ②内閣の権限についてパワーポイントを用い、説明を行う。 ③行政委員会の説明をパワーポイントと教科書を用いて行う。</p>	<p>①・教科書P133.8~10 ・ワークシート(4) ②・パワーポイントP12 ・ワークシート(4) ③・パワーポイントP13</p>	<p>(技能) 内閣の権限について資料を用いてワークシートにまとめることができた。</p>
6分	<p>7. 内閣総理大臣の権限について理解する。 ①内閣総理大臣の権限について教科書で確認しながらワークシートの空所を記入する。 ②語句の確認と説明を聞く。 ③閣議について説明を聞く。</p>	<p>7. 内閣総理大臣の権限について説明し、生徒に理解させる。 ①机間指導を行う。 ②内閣総理大臣の権限についてパワーポイントを用い、説明を行う。 ③閣議について説明を行う。</p>	<p>①・資料集P148① ・パワーポイントP14 ・ワークシート① ④・パワーポイントP14 ・ワークシート①</p>	<p>(技能) 内閣総理大臣の権限について資料を用いてワークシートにまとめることができた。</p>
10分	<p>8. 議院内閣制の仕組みについてまとめる。 ①資料集を用いて議院内閣制の仕組みについてまとめる。 ②ペアで確認する。 ③発表する。 ④解答を聞く。</p>	<p>8. 議院内閣制の仕組みについてまとめさせる。 ①机間指導 ②ペアで確認させる。 ③発表させる。 ④説明を行う。</p>		<p>(思考・判断・表現) 議院内閣制の仕組みについて思考し、まとめることができた。</p>
<p><b>議院内閣制の仕組みについてまとめよう。</b></p>				
まとめ 2分	<p>9. 本時の学習活動の自己評価表を記入する。</p>	<p>9. 本時の学習活動の自己評価表を配布し、記入するよう促す。</p>	<p>・自己評価表</p>	

(4) 評価

- ・内閣と国会の関係性や内閣の権限について学び、議院内閣制の仕組みについて理解できるようになる。

生徒の学習活動における自己評価表

5. 政治機構と国民生活 ～議院内閣制と内閣の権限～

観点	評価内容	点数
関心・意欲・態度	内閣について関心を得ることができた。	
思考・判断・表現	議院内閣制の仕組みについて思考し、まとめることができた。	
技能	内閣の総辞職についてポイントを押さえて、まとめることができた。	
	衆議院の解散について資料を用いてまとめることができた。	
	内閣の権限について資料を用いてワークシートにまとめることができた。	
	内閣総理大臣の権限について資料を用いてワークシートにまとめることができた。	
知識・理解	日本の議院内閣制について理解できた。	
	行政権について理解できた。	
	内閣と国会の関係性について知識を得ることができた。	

5. とてもよくできるようになった      4. できるようになった      3. どちらかというところできるようになった  
 2. あまりできなかった      1. できなかった      五段階評価で点数をつける。

8. Result (結果)

8-1. SWOT分析とは

指導案に関して、SWOT分析という手法を用いて結果を導き出していく。ここでは、SWOT分析とはどのような手法であるのかについて簡単に説明を行うものとする。

SWOT分析は、経営戦略や計画の現状分析を行うための分析手法として使用される機会が非常に多いフレームワークである。政策の内部環境と外部環境の分析を統合的に行い、ビジネスの機会を発見するために必要なものである。それぞれをプラス要因とマイナス要因、内部要因と外部要因に組み合わせて分析を行う<sup>註12)</sup>。

8-2. 現役教師が作成した指導案のSWOT分析における結果

SWOT分析より、強みは『授業を系統立てて進めることができる』ということが挙げられる。弱みは『あらかじめ決められた手順通りにしか授業を進めることができない』ということが挙げられる。機会は『シンキングツールを用いることで生徒の自由な発想を得ることができる』ということが挙げられる。脅威は『意欲的に授業に参加してくれない生徒が多いと教師が思い描いた様に授業が進まない』ということが挙げられる。

	内部環境	外部環境
プラス要因	『授業を系統立てて進めることができる』	『シンキングツールを用いることで生徒の自由な発想を得ることができる』
マイナス要因	『あらかじめ決められた手順通りにしか授業を進めることができない』	『意欲的に授業に参加してくれない生徒が多いと教師が思い描いた様に授業が進まない』

(主著者が作成)

### 8-3. 主著者が作成した指導案のSWOT分析における結果

SWOT分析より、強みは『主体的・対話的で深い学びという学びのアプローチを意識した授業展開ができる。』ことと『電子教材等のICTを用いた授業方法に向いている。』ということが挙げられる。弱みは『教示の時間が十分に取れない場合がある。』ことと『決められた手順通りにしか授業を進めることができない。』ということが挙げられる。機会『ICE評価を用いることで生徒の習熟度が一目で分かる。』ことと『生徒の不得意と得意が数的視点で分かる。』ということが挙げられる。脅威は『主体的学びに消極的な生徒がいる。』ことと『生徒が自己評価について適当に点数をつける場合がある。』ということが挙げられる。

	内部環境	外部環境
プラス要因	『主体的・対話的で深い学びという学びのアプローチを意識した授業展開ができる。』 『電子教材等のICTを用いた授業方法に向いている。』	『ICE評価を用いることで生徒の習熟度が一目で分かる。』 『生徒の不得意と得意が数的視点で分かる。』
マイナス要因	『教示の時間が十分に取れない場合がある。』 『決められた手順通りにしか授業を進めることができない。』	『主体的学びに消極的な生徒がいる。』 『生徒が自己評価について適当に点数をつける場合がある。』

(主著者が作成)

## 9. Discussion (考察)

### 9-1. 現役教師が作成した指導案のSWOTクロス分析を用いた考察

強み×機会	強みを活かして機会を勝ち取る方法は？ 教師が意図した知識を生徒が身につけることができ、主体的な学びにつながる。
強み×脅威	強みを活かして脅威を機会に変える差別化は？ 教師が段階的に授業を組み立てることができるため、本単元に興味が無い生徒にも注目させる様な仕掛けづくりや生徒のレベルに合わせた授業づくり並びに評価項目の設定が必要。
弱み×機会	教師があらかじめ授業における複数のシナリオを作っておき、生徒の自由な発想を導く。
弱み×脅威	授業が進度通り進むように、様々なアプローチを試みる。

(主著者が作成)

9-2. 主著者自身が作成した指導案のSWOTクロス分析を用いた考察

強み×機会	強みを活かして機会を勝ち取る方法は？ ICE評価表を用いることで生徒の質的な評価ができるとともに、教師と生徒の双方が習熟度について目視することができる。 ICEで指導案を作成することで段階的なアプローチを試みることができる。
強み×脅威	強みを活かして脅威を機会に変える差別化は？ 主体的学びに消極的な生徒がいる場合は、教示の時間を増やし生徒が知識を身につける時間をあらかじめ設けてからアクティブラーニングへと移行させる。 自己評価表といっても一授業単位時間だけの評価ではなく、単元の中でどの程度知識及び思考、表現力等が定着したのかを相対的に評価するものである。また、生徒への説明に関して表向きは、授業に関する評価ということに意味づけしておく。
弱み×機会	授業の前半に教示の時間をしっかり取り、後半にアクティブラーニング中心の授業展開にする。 ICE評価表の項目を複数策定し、1つのパターンだけでなく、いくつかの授業の流れを段階的に考えておく。
弱み×脅威	反転学習を用いることで授業時間の確保と主体的な学びを促進させる。 生徒に事前学習を行わせることで単元についての知識や興味をあらかじめ持たせる。

(主著者が作成)

10. Conclusion (結論)

日本における「主体的・対話的で深い学び」いわゆるアクティブラーニングの発展のために、学校現場においてどの様な授業が行われているのかを調査するとともに主著者自身においても最新の授業スタイルの提案を行って行かなければならないと考えている。また、日本だけでなく世界には数々の教育大国が存在する。例をあげるとフィンランドをはじめカナダやフランス、アメリカや韓国などがある。近年ではPISA調査で1位を取ったシンガポールが注目を集めている<sup>註13)</sup>。その一方で、日本における学習形態や方法は古いという考えもある<sup>註14)</sup>。主著者自身は日本の教育を海外の教育システムや教育方法と比較すると遅れているという印象をもっている。日本国内においての問題点であれば以下に示す通り、明白である。「ICT教育が上手くいってない点」や「小中高生におけるタブレットの配布が遅れている点」、また「最近になってアクティブラーニングの重要性に気づき学習指導要領に取り入れてみたものの現場の教員が生徒主導の教育スタイルに対応できていない」など課題は山積みである。だが、一概に今の日本の教育スタイルを捨てることが良いということではないのである。ただ、海外の教育スタイルを見習うところは多々あるのではないかと主著者は考えている。しかし、難しい点がただ単に

海外の教育スタイルをそっくりそのまま現場で行うことは不可能である。そのため、海外の教育スタイルを日本の教育に照らし合わせながら応用していかなければならないと考えている。だが、学校現場の教員はただでさえ時間が無い日々を送っている。ゆえに、前述した様に主著者自身が最新の研究成果に基づき提案を続けていかなければならないと考えている。それが研究者を目指す者の役目であると心得ている。

教育というものは時代において様々な事柄が変化していく。だから常に、変化していく波に取り残されないように学び続け対応していかなければならない。

11. Acknowledgment (謝辞)

本研究において、このような形での研究成果の発表の機会を賜った本学地域総合研究所および諸先生方に感謝申し上げたい。

【参考文献一覧】

註1) 江頭知遼・加藤久雄・登り山和希ほか  
学生視点から考える地域課題解決型学習を通した高大連携に関する研究Ⅱ～高大連携型プロジェクトにおけるルーブリックによる評価と検証～「長崎ウエスレヤン大学・地域総合研究所・研究紀要」

18巻・1号・P61~72・2020年3月

委員会発行)

註2) 「主体的・対話的で深い学び」とは  
[https://www.tochigiedu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h29\\_jyugyokaizen/pdf/h29\\_jyugyokaizen\\_01-2.pdf](https://www.tochigiedu.ed.jp/center/cyosa/cyosakenkyu/h29_jyugyokaizen/pdf/h29_jyugyokaizen_01-2.pdf) (2020年5月9日)

註12) SWOT分析とは  
<https://ferret-plus.com/4271> (2019年10月22日)

註3) 主著者: Sue F Young・Robert J.Wilson  
監訳: 土持ゲーリー法一  
「主体的学び」につなげる評価と学習方法  
カナダで実践されるICEモデル  
(2013年5月13日 初版)

註13) PISAとは  
<https://coeteco.jp/articles/10630>  
(2021年12月1日)

註14) 日本の教育制度は転換できるのか?  
<https://gentosha-go.com/articles/-/19030>  
(2021年12月1日)

註4) ルーブリックって何?  
[https://www2.chubu.ac.jp/quest/about/documents/rubric\\_what.pdf](https://www2.chubu.ac.jp/quest/about/documents/rubric_what.pdf) (2020年5月9日)

註5) 高校生のアイデンティティについて(調査  
研究報告書検索-独立行政法人 国立青少年教育  
振興機構)  
[http://www.niye.go.jp/kenkyu\\_houkoku/contents/detail/i/100/](http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/100/) (2021年12月1日)

註6) PBLとは  
<https://studystudio.jp/contents/archives/36751>  
(2021年12月1日)

註7) 探究学習とは  
<https://tensk.jp/quest/> (2021年12月1日)

註8) ジグソー法  
<https://achievement-hrs.co.jp/ritori/?p=2967>  
(2021年12月1日)

註9) 反転学習  
<https://schoo.jp/biz/column/250>  
(2021年12月1日)

註10) 広島県教育委員会 第41回実践研究助成  
中学校ICEモデルを適用した授業による思考力・  
表現力の育成に関する研究(広島県竹原市立吉名  
中学校)  
[http://www.pef.or.jp/wp-content/themes/panasonic\\_theme/db/grant\\_eva\\_pdf/2015\\_55.pdf](http://www.pef.or.jp/wp-content/themes/panasonic_theme/db/grant_eva_pdf/2015_55.pdf)  
(2021年12月1日)

註11) 平成27年度 広島県教育資料(広島県教育

